

シラスウナギ アフリカ産国内流通か

24.4.11 宮日 輸入初確認 在来種へ影響懸念

今年2月、日本のウナギ（ニホンウナギ）とは別種のマダガスカル産などの稚魚（シラスウナギ）が輸入され

ていたことが財務省の貿易統計で10日、明らかになった。

アフリカ産ウナギの輸入が統計上、確認されたのは初めて。ニホンウナギの稚魚が3年連続の極度の不漁であることを背景に、別種のウナギの稚魚が国内に養殖用として流通してい

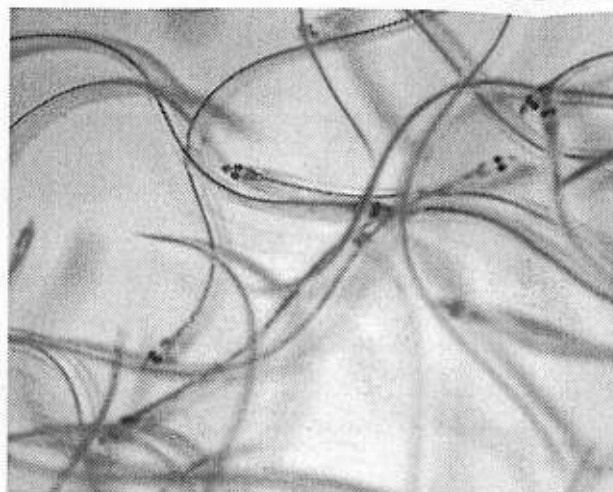
る可能性が高い。専門家は「外来種の導入が拡大すると、（逃げ出して）日本のウナギの生息域を圧迫するなど悪影響を与える懸念がある」と警告している。

統計によると2月、アフリカのマダガスカルから30匹、フィリピンから50匹のシラスウナギが輸入されていた。正確な種類は不明だが、専

門家によると、マダガスカル産のウナギはアフリカ東海岸を中心に分布する別種のウナギ。フィリピンで取れるシラスウナギにはさまざまな種類があり、中にはニホンウナギがごくわずかに混ざっていることもあるが、大部分は別種だという。

ウナギ養殖業関係者によると、過去の不漁時にも、やはり別種のヨーロッパウナギやアメリカウナギの稚魚が養殖用に輸入されたことや、育ったヨーロッパウナギが資源維持のためとして放流され、日本周辺に定着しているのが確認されたことがある。

ウナギの生態に詳しい東京大の青山潤・特任准教授は「成長した外来種のウナギが逃げ出したり、放流されたりして定着すれば、ただでさえ深刻なニホンウナギの生息状況に悪影響を与える可能性がある」と慎重な対応を求めている。



ニホンウナギの稚魚。外来のウナギとは区別が困難という（愛知県水産試験場提供）

シラスウナギの推定漁獲量
(水産庁による)

